

1-2-13b文化／文明

「文化／文明」の第2弾は、「文化」という語のもつややこしさについて考えます。

②文化

i) 本能

日常での会話やライトノベルなどでは適当に使われていますが、、、人間について語るとき、「**本能**」や「**本能的**」という語の取り扱いにはかなり注意が必要です。

本能とは〈遺伝的に決まっている行動のパターン〉、生まれつき決まっていいて変えられないもの、です。

動物は、その行動のほとんどを本能によって行っていると考えられています。

ところが、人間の何気ない動作や行動も、実は文化的なもの、**学習**されたものです。

考えてみると、人間が生まれて最初に教え込まれるのはおしっこを我慢することです。

おしっこって、生理的な現象、、、のはずですよね？

歩き方も教育されたものです。

もともと、日本では、右足と右手、左足と左手を同時に出す、いわゆるナンバ歩きが普通でした。

田んぼのなかを歩こうとすると、自然とそうした歩き方になります。

今のように、左右の手足を交互に出す歩き方は、明治以来の学校教育の結果です。

おしっこや歩き方のようなものすら、文化的なものだということです。

私たち人間は、本能ではなく文化によって生きています。

それはどうしてでしょうか。

本能は、遺伝子によって、親から子へ、世代的に遺伝する**先天的**なものです。

それに対して、文化は、言語によって、社会的に遺伝する**後天的**なものです。

生物が生き残るためには、環境の変化に対応しなければなりません。

人間は、たとえば、新型コロナのパンデミックの際、世界中の人々が知恵を出し合い対処しました。

それが言葉によって世界全体に伝わり、少くない犠牲は出ましたが、多くの人が生き延びました。

が、本能に頼っている動物は、そうはいきません。

新しい環境に適応する個体だけがわずかに生き残り、それが次の世代を担っていくことになります。

そう考えると、文化は、その柔軟性やスピードにおいて、本能を圧倒しています。

人間は、文化を得た結果、本能に頼れなくなったわけです。

ただ、そのスピードこそが自然環境問題を起こしているという指摘もあります。

毛虫が葉っぱをかじって木を枯らしても、ビーバーがダムを造って川をせき止めても、環境を破壊するほどにならないのは、その自然破壊のスピードがほどほどだからです。

が、人間は、自然の想定している以上のスピードで環境を変えていきます。

それが、自然環境を破壊しているというわけです。

ii) 言語

「文化」と表裏一体の関係にあるのが「**言語**」です。

私たちは、言語を通して、世界を見ています。

その世界の中で生を営んでいるのが私たちです。

文化が〈人間の生の営み〉である以上、その根底には言語があります。

言語は、文化を伝えるただの手段ではなく、むしろ言語こそが文化を作り出しているといえます。

近代国家の成立に「**国語**」が必要だったのはそのせいです。

一つの言語を共有することで、一つの文化を共有する——それが、「私たちは一つの民族なのだ」という民族意識を醸成したわけです。

そのせいで、文化は、国家や民族を単位として語られてしまいます。

日本には、「日本文化」という一つの文化があるかのように語られてしまいます。

たとえば、鯨。

海には海の暮らし、山には山の暮らしがあります。

昔から鯨を食べる地域がある、そうした文化を持つ地域がある、というのはまちがいでないにしても、「日本古来からの食文化だ」と日本全体のことのよう語るのはまったくのまちがいです。

が、そうってしまうのは、日本語という一つの言語を共有することで、日本文化という一つの文化を共有していると思っているからです。

でも、それは本当にそうでしょうか。

そもそも、日本語と一括りにしていますが、日本全国で一つの言語は共有されていません。

方言はもちろん、**標準語**と呼ばれる言語も地域によって微妙に違います。

それがそのまま文化の違いなのです。

文化は、人間の生の営みである以上、異なる地域で異なる人々が暮らしているなら、そこには違う文化が広がっています。

だから、「日本文化」と一括りにできるものなどなく、「日本の文化」という種々雑多ないろいろな色合いをもった文化が日本には広がっています。

その一つに鯨を食べる文化がある、ということに異論はありません。

iii) 自然

「文化」の対義語は「**自然**」です。

「人間」と「自然」が対義語だとわかるなら（デカルト二元論）、自然は、人間の生の営みである文化の対義語だとわかるはずです。

ややこしいのは、その文化が私たちにとってとても自然に感じることです。

いわれてみれば、おしっこや歩き方は、たしかに学習させられた人為的、文化的なものでしょう。

しかし、私たちは日ごろそのようには思いません。

そうした所作こそが、日常生活を成り立たせている、私たちにとって当たり前なもの、きわめて自然なものだからです。

文化は、いわば「第二の自然」として、人間の生を成り立たせているのです。

結局、私たちの生は、文化によって生み出された世界によって成り立っており、それこそが私たちにとって自然といえるものなのでしょう。

だからこそ、それが本当は自然でないことに気づかずに、偏狭な文化観や民族観、国家観に陥ってしまう人が少なくないのでしょう。

iv) 歴史

「文化」を語るとき、同時に出てきやすいのが「**歴史**」という語です。

実は、歴史も〈人間の生の営み〉と定義できるからです。

ただ、文化が、〈人間の生の営み〉を空間的な広がりによって**共時的**にとらえたものであるのに対して、歴史は、時間の流れに沿って**通時的**にとらえたものである、という違いがあります。

詳しくは、「歴史」の項をご覧ください。